教科書文庫
4
815
51-1926
2000301923

42674
教科書文庫
4
5815
51-1926
200030
1923

文部省檢定濟

師範學校
日本文法教科書
上卷

山田孝雄著

東京
寶文館藏版

教科書文庫
4
815
51-1926
2000301923

大正十五年四月一日
文部省檢定濟

師範學校日本文法教科書

山田孝雄著

東京　寶文館藏版

広島大学図書
2000301923

資料室
3759
Y013

廣島大學圖書之印

廣島大学 教 38330 図書

例言

一、本書は師範學校の文法教科書に充てむがために編纂したるものなり。

一、本書は文法全般に亘り、平易簡明を旨として記述したるものなり。ことに從來の注入教授、器械的記憶の弊を一掃せむがため、多くの文例より推して文法上の法則を發見せしめ、或は生徒をして種々の表を作製せしむるなど、一に開發的、歸納的に叙述したり。

一、本書の練習問題は質及び量に於て、精選を施し以て正確なる知識の收得を期したり。

大正十四年十月

師範學校 日本文法教科書 上卷

目次

總說……一
單語篇
第一章 名詞……四
第二章 代名詞……六
第三章 動詞……一〇
第四章 形容詞……五〇
第五章 助動詞……五六

第六章　副詞……七九
第七章　接續詞……八二
第八章　感動詞……八五

師範學校 日本文法教科書 上卷目次 終

師範學校 日本文法教科書 上卷

總說

〔一〕人の思想を聲音にてあらはせるものを**言語**といひ、言語を形にあらはす符號を**文字**といふ。文字にてまとまりたる思想を書き綴れるものを**文**又は**文章**といふ。

〔二〕言語は各國必ずしも同じからず。英吉利語、佛蘭西語、獨逸語、露西亞語、支那語、日本語等皆異なるものなり。**國語**とは國民が自國の言語、文章を呼ぶ名稱にして、我等は

日本語をさして**國語**といひ、日本文をば**國文**と稱するなり。

【三】　談話に用ゐる言語と文章に用ゐる言語とは元來同じかるべきものなるに、多少法則の異なる場合あり。かくの如き場合には談話に用ゐるものを**口語**といひ、文章に用ゐるものを**文語**といふ。

【四】　口語及び文語にはそれ〴〵定まれる法則あり。之を**文法**といふ、文法によらざれば正しくおのれの思想をあらはすことを得ず。

【五】　文法にては、すべて一つ一つの語をば**單語**といふ。例へば

これは梅の花だ。

は六つの單語よりなるが如し。

【六】　單語はこれを八つの種類に分つ。

名詞　代名詞　動詞　形容詞
副詞　接續詞　感動詞　助詞

これなり。而、その單語の各種類を**品詞**といふことあり。

單語篇

第一章　名詞

〔七〕　石山寺の秋の月、雲をさまりて影清し。

春よりさきに咲く花は、比良の高嶺の暮の雪。

右の文例において「石山寺」「秋」「月」「雲」「影」「春」「花」「比良」「高嶺」「暮」「雪」は、何れも事物の名稱として用ゐたる單語なり。かくの如くすべて事物の名稱となれる單語を**名詞**といふ。

〔八〕　一、二、三、百、千、萬、四百個、第一、何十番等の如く、事物の數量、又は順序を數ふるに用ゐる單語も名詞に屬す。

廣島大學圖書館

練習

次の文章中の名詞を抽き出せ。

(1)日章旗は白地に赤でかかれてあります。

(2)月明りにも水底の砂が分明に數へられる。

(3)勉強は幸福の母にして怠惰は立身の敵なり。

(4)華麗、優美、雄大の三つを兼ね備へた風景は、實に富士山である。

(5)國家の繁榮が貿易の盛運に基づく事の大なるはいふまでもなし。

(6)富士一つ埋み殘して若葉かな。

(7)男子百人に對して女子九十八人にして、其の差の割合僅かに二分に過ぎず。

(8)風俗の年と共に改るは自然の勢ともいふべけれど、知らず識らずをごりの風に染り行くこそうたてけれ。

(9)西郷のこの一言で江戸百萬の生靈もその生命と財産とを保つことが出來、德川氏も亦その社稷を保つことを得たのだ。

(10)鳥も翔らず、鹿も渡らぬ此の天險、人馬兵糧幾萬を擁して越えんとするハンニバルは抑〻人かはた神か。

第二章　代名詞

それはあんまりのおことばです。私も日本男子であります。

汝の言ふことは更にわからぬ。

彼は決して二言致すやうな者では御座いませぬ。

そこにをるのは誰か。

こちらには川が流れあちらには山が峙つてゐる。

これらの文中にある「私」「汝」「彼」「それ」「そこ」「誰」「こちら」「あちら」等は何れも事物をさしてその名稱をいふ代りに用ゐたる單語なり。これらを**代名詞**といふ。

〔一〇〕名詞と代名詞とを**體言**といふ。

練　習

次の文中にある代名詞を抽き出せ。

(1)その人の許に行きて相談したまへ。

(2)汝自身の成功の爲に規律は之を嚴守すべし。

(3)この說を聞く人、いづれもかれの博學に服せり。

(4)それこそ此方も望む所にて候へ。

(5)あちこち歩いてゐるうちに、日がくれてしまつた。いづこともなく、さびしい野寺の鐘が聞える。

(6)僕、足下の言を用ゐず自ら求めてこの失敗に陷る。あ誰をか恨み何をか咎めむ。

(7)諸君、どうか僕の友の爲に杯を擧げてくれたまへ。彼の將來を祝福して。

(8)愈戰地へ行かれることになつて見ると、半時も早く出發したいと誰一人思はない者はなかつた。

(9)我も源氏の嫡男なり。御邊も平氏の嫡男なり。よき敵ぞ。寄れや。組まむ。

(10)その方は智仁勇の三德を具へたる良將なり。それに引きかへわれには一德だになし。しかるに不思議にも、その方は一國だに取り得ぬに、われは天下を取れり。

第三章　動　詞

【二】山を越え、川を渡りて、漸く人家ある所に出づ。

右の文例において、「越え」「渡り」「出づ」は何れも事物の作用をあらはし、「ある」は事物の存在をあらはす單語なり。かくの如く事物の作用、存在をあらはすに用ゐる單語を動詞といふ。

【三】

(1)

(イ)停車場にて待たむ。
(ロ)數時間待ちたり。
(ハ)汽車を待つ。
(ニ)汽車を待つもの多し。
(ホ)暫待てば汽車來る。

(2)

(イ)明朝早く起きむ。
(ロ)朝早く起き出づ。
(ハ)朝は六時に起く。
(ニ)早く起くる習慣あり。
(ホ)早く起くれば心地よし。

待　たちつて

起　きくくれる

(3)

(イ)制服をきむ。
(ロ)制服をきたり。
(ハ)制服をきる。
(ニ)制服をきる時あり。
(ホ)制服をきれば、心正し。
(ヘ)制服をきよ。

(4)

(イ)早く食事をせむ。
(ロ)七時に食事をしたり。
(ハ)兄とともに食事をす。
(ニ)食事をする暇もなし。
(ホ)食事をすれば、待ち給へ。
(ヘ)早く食事をせよ。

著　きるきれる

爲　しせすれる

(5)

(イ)もろともに死なむ。
(ロ)一門悉く死に絶ゆ。
(ハ)國事にて死ぬ。
(ニ)王事に死ぬる人多し。

(6)

(イ)來春試驗を受けむ。
(ロ)試驗を受けたり。
(ハ)教室にて試驗を受く。
(ニ)試驗を受くる生徒あり。

死　なにぬぬぬれる

(ヘ)こゝに待て。
(ヘ)朝早く起きよ。

受（くれる）（くく）（け）

（ホ）我ここに死ぬれば、汝は生き殘りて王事につとめよ。

（ヘ）潔く王事に死ね。

以上の文例を通覽すれば、動詞につき多くの事柄を發見すべし。即ち

（一）動詞は用ゐ方の異なるによりて、語の形に變化を生ずること。かく語形の變化するを活用といふ。

（二）動詞は五十音圖の一行に限りて活用し、決して他行に亘らざること。

（三）動詞の活用の形に種々あること。（五十音圖の段にあてはめて考へみよ。）

（ホ）今日試驗を受くれば成績は近きに知られむ。

（ヘ）今年は必ず試驗を受けよ。

（四）動詞の用ゐ方は六通りあること。（各文例のイ、ロ、ハ、ニ、ホ、ヘの各場合及び、その動詞の下の語につきて注意せよ。）等なり。

練習

一、上の文例にならひて次の動詞の活用を考へみよ。

讀む　書く　棄つ　落つ　悔ゆ

有り　絶ゆ

二、次の文中より動詞を抽き出して五十音圖の何れの行に活用するかを考へよ。

(1)梅は散りて鶯の聲も老いたり。

(2)戈とりて月見るたびに思ふかな、いつか屍の上に照るやと。

(3)言を發するに先だちてよく其の言を選ばざるべからず。

(4)人一たび故郷を離るれば、故郷の風物は常に其の心中に往來す。

(5)夜は川下の方へ流れて曙の光は四邊に滿ちて居る。

(6)鏡は一物をたくはへず、私の心なくして萬象を照すに、是非善惡の姿あらはれずといふことなし。

(7)困難に堪へて事業に當る人、絶えず理想に向ひて進む

人、必ずや成功の彼岸に達せむ。

〔三〕動詞の用ゐ方に六通りあることは既に述べたるが如し。今各の場合を前にあげたる文例によりて說明せむ。

(イ)の文例をみるにすべて動詞の下に「む」つきて事の未だ然らざる場合をあらはすに用ゐらる。この語形を**未然形**といふ。この形は「む」の外に、「雨降らば中止せむ」「死なば苦を忘るべし」などの如く「ば」に接して假に定めていふ意を表すにも用ゐらる。

(ロ)の文例をみるに、動詞の下に動詞、形容詞(後に說く)のつく場合に用ゐらる。この語形を**連用形**といふ。動詞、

形容詞を總稱して用言といふによりてかく名づけたるなり。「たり」もまたこの形につく。

(ハ)の文例をみるに何れも文章を終止するに用ゐらる、この語形を**終止形**といふ。

(ニ)の文例をみるに何れも名詞、代名詞卽ち體言に續くに用ゐらる。この語形を**連體形**といふ。

(ホ)の文例をみるに動詞の下に「ば」つきて已に定まれることを條件として示すに用ゐらる。この語形を**已然形**(イゼン)といふ。この形には「ど」「ども」のつくことあり。

(ヘ)の文例をみるに何れも命令の意をあらはすに用ゐらる。この語形を**命令形**といふ。

〔一四〕今前にあげたる文例中の動詞につきて以上の六語形を表にして示さむ。

未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
待	た	ち	つ	て	て
起	き	き	く	くる	くれ	き
受	け	け	く	くる	くれ	け
著	き	き	きる	きる	きれ	き
爲	せ	し	す	する	すれ	せ
死	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね

【一五】右の表においても知る如く「死ぬ」といふ動詞は動詞中最も多く語形の變化を有すれども、その他の動詞にありては同一の語形にて二三の用を兼ぬるものなり。されば或動詞の六の語形を知らんとせば、先づ次の如く「む」(ば)「たり」(或は動詞)「○」「時」(その他の體言)「ば」(どども)「よ」と記しおきて、その動詞よりこれらの語にいひつゞけて見るをよしとす。かかる方法による時は如何なる動詞にてもその六語形を知ることを得。

かか…む(ば)	未然形	に…む(ば)	未然形
かき…たり(又は動詞)	連用形	に…たり(又は動詞)	連用形
書 かく…○	終止形	似 にる…○	終止形
かく…時(體言)	連體形	にる…時(體言)	連體形
かけ…ば(ど、ども)	已然形	にれ…ば(ど、ども)	已然形
かけ…よ	命令形	に…よ	命令形

練習

一、次の文章中の動詞を指摘し、且つその語形の名をいへ。

(1)百舌鳴く林に、柿の實の赤きを見る。

(2)恩を受けば必ず報いよ。

(3)故に一身を捨つるも家名を汚し祖先を辱しむるを欲せず。

(4)雨降りて地固まる。

(5)思言は耳に逆へども行に利あり。

(6)白雲に羽うちかはし飛ぶかりのかずさへ見ゆる秋の夜の月。

(7)我若し生きて世にあらば、汝が後を弔はむ。死なば後世にて逢ふべし。

二、次の動詞の六の語形をいへ。

育つ　笑ふ　流る　感ず　煑る

老ゆ　捨つ　恨む

【一六】動詞が五十音圖の同じ行の幾段に亘りて活用するかによりて、動詞の活用を類別して次の九種とす。

四段活用　ナ行變格活用　ラ行變格活用

カ行三段活用　サ行三段活用　上二段活用

下二段活用　上一段活用　下一段活用

【一七】**四段活用**「讀む」「書く」の動詞の活用語形につき考へみよ。然る時はこれらの動詞が五十音圖中の「ア」「イ」「ウ」「エ」の四段に活用しその語形は終止形と連體形と同じく、又已然形と命令形と同じきを發見すべし。かくの如き活用を**四段活用**といふ。

【一八】文語にて四段活用をなす動詞は、口語にても、また四段活用をなし、その語形全く同じ。

【一九】四段活用をなす動詞はその數甚だ多けれど、

行く（カ行）　貸す（サ行）　待つ（タ行）
買ふ（ハ行）　讀む（マ行）　知る（ラ行）

の語にて見る如く五十音圖の六の行にわたりて活用するものにして他の四行には活用せず。

練習

一、次の動詞中より四段活用の動詞を擇び出せ。

返す　富む　出づ　取る　急ぐ
見る　住む　いふ　受く　立つ
勝つ　避く

二、國文教科書より四段活用の動詞を六つあげよ。

〔二〇〕ラ行變格活用　「有り」といふ動詞につき、その活用を考へみよ。然る時は、この動詞が五十音圖のラ行の「ア」「イ」「ウ」「エ」の四段に亘りて活用するを知るべし。されど通常の四段活用の動詞と異なり、終止形は四段活用にありては「ウ」段なるに、この活用にありては「イ」段を用ゐる。さればこの動詞は連用形と終止形と同じく、又已然形と命令形と同じきものなり。今これを通常の四段活用と分ちて「あり」の如き活用を**ラ行變格活用**といふ。

〔二一〕ラ行變格活用の動詞は「有り」の外「居り」、「侍り」の二語のみ。

〔二二〕口語の動詞にはラ行變格活用をなすものなく、文語のラ行變格活用の動詞は口語にては通常の四段活用をなす。

練　習

一、ラ行變格活用形を表にて示せ。

二、有りといふ動詞の口語の活用を文例にて示せ。

〔二三〕**ナ行變格活用**　「死ぬ」といふ動詞は前にあげたる文例にて知る如く、五十音圖の「ナ」行の「ア」「イ」「ウ」「エ」の四段に亘りて活用する外に、なほ「ウ」段に「る」と「れ」との添ひたるものにも活用す。されば活用の形すべて六つあることは前既に說明したるが如し。かやうの活用を**ナ行變格活用**といふ。

〔二四〕口語の動詞にはナ行變格活用をなすものなく、文語のナ行變格活用の動詞は口語にては通常の四段活用をなす。

練　習

一、ナ行變格の活用形を示せ。

二、死ぬといふ動詞の口語の活用を文例にて示せ。

〔二五〕**上一段活用　下一段活用**　「著る」「蹴る」の動詞の活用形を考へみよ。然る時は「著る」は五十音圖の「イ」段の一段とこれに「る」「れ」の添ひたるものとに亘りて活用し、「蹴る」は五十音

圖の「エ」段の一段と、これに「る」「れ」の添ひたるものとに亘りて活用するを知るべし。かく「著る」の如く五十音圖の中央より上の一段に活用するを**上一段活用**といひ、「蹴る」の如く中央より下の一段に活用するを**下一段活用**といふ。

〔二六〕上一段活用と下一段活用とは未然形と連用形と命令形と同じく、又終止形と連體形と同じきものなり。

〔二七〕普通に用ゐる上一段活用の動詞は次の十語にして、

著る　（カ行）
似る　（ナ行）
干る　（ハ行）
見る（惟る、顧る、鑑る）（マ行）
射る　鑄る　（ヤ行）
居る　率ゐる　用ゐる　（ワ行）

五十音圖の六行にわたりて活用するなり。

〔二八〕下一段活用の動詞は「蹴る」の一語あるのみ。

〔二九〕文語にて上一段、下一段活用をなす動詞は、口語にても、また上一段、下一段活用をなし、その語形全く相同じ。

練習

一、上一段の活用形を表にて示し活用語をあてはめよ。

二、下一段の活用形を表にて示せ。

〔三〇〕 **上二段活用　下二段活用**　「起く」「受く」の二動詞につきその活用形を考へみよ。　然る時は「起く」は五十音圖の「イ」「ウ」の二段となほ「ウ」段に「る」と「れ」との添ひたるものとに亘りて活用し「受く」は「ウ」「エ」の二段となほ「ウ」段に「る」と「れ」との添ひたるものとに亘りて活用するを知るべし。　かくの如く二語とも同じく二段に活用すれども「起く」の方は中央より上の二段に活用し「受く」の方は下の二段に活用す。　故に「起く」の如く活用するを**上二段活用**といひ「受く」の如く活用するを**下二段活用**といふ。　上二段活用、下二段活用の動詞は未然形と連用形と命令形と同じきものなり。

〔三一〕 口語には上二段活用、下二段活用をなす動詞なし。　文語の上二段活用、下二段活用の動詞は口語にては上一段活用、下一段活用をなす。

〔三二〕 上二段活用をなす動詞の活用は五十音圖にあつれば、

起く　（カ行）
掘ず　（サ行）（上の一語あるのみ）
落ち　（タ行）
強ひ　（ハ行）
浴み　（マ行）
老ゆ　（ヤ行）（上の外「悔ゆ」「報ゆ」の二語あり）
懲る　（ラ行）

の七行にわたりて活用するものなるが、これに屬する語數

はさほど多からず。

【三三】下二段活用をなす動詞はその數頗る多くして

得（ア行）（この一語あるのみ）

授く（カ行）

寄す（サ行）

捨つ（タ行）

尋ぬ（ナ行）

教ふ（ハ行）

改む（マ行）

榮ゆ（ヤ行）

枯る（ラ行）

【三四】植う（ワ行）（上の外飢う「据う」の二語あり）

の如く五十音圖の各行にわたりて活用するなり。

練習

一、次の動詞の活用形をいへ。

掛く　滿つ　曲ぐ　綻ぶ　企つ　秀づ

集む　据う　盡く　攀づ　痩す　重ぬ

延ぶ　迎ふ　媚ぶ　下る　揃ふ　求む

癒ゆ　疲る　預く

二、國文教科書の一課より上二段活用の動詞を摘出せよ。

三、國文教科書中より下二段活用の動詞十五をあげよ。

四、次の語の各活用形を表にて示せ。

過ぐ　落つ　強ふ　恨む　懲る

五、下二段活用の動詞に當る口語の動詞は何活用をなすか。

カ行三段活用はカ行變格活用ともいふ。

【三四】 **カ行三段活用**　「來」といふ動詞につきその活用形を考へみよ。然る時は五十音圖のカ行の「き」「く」「こ」の三段と「く」に「る」と「れ」との添ひたるものとに亘りて活用するを知るべし。かくの如き活用を**カ行三段活用**といふ。この活用をなす動詞は「來」の一語のみなり。カ行三段活用は未然形と命令形と同じきものなり。

【三五】 「來」の口語を考へみよ。然る時は文語の終止形「く」が「來る」と變るのみにて、他の語形の同じきを知るべし。

サ行三段活用はサ行變格活用ともいふ

【三六】 **サ行三段活用**　「爲」といふ動詞につき、その活用形を考へみよ。然る時は五十音圖の「サ」行の「し」「す」「せ」の三段と「す」に「る」「れ」の添ひたるものとに亘りて活用するを知るべし。かくの如き活用を**サ行三段活用**といふ。この活用に屬する動詞は「爲」の一語のみなり。サ行三段活用は未然形と命令形と同じきものなり。

【三七】 「爲」の口語を考へみよ。然る時は文語の終止形「す」が口語にては「する」と變るのみにて他の語形は同じきを知るべし。

【三八】 サ行三段活用は名詞、漢語、外國語等を動詞とする力を

有するものなり。例へば

話し
論　發達（せ　し　する　すれ　せ

の如し。

練　習

一、カ行三段の活用形を表にて示せ。（文語口語とも）

二、「爲」の口語の活用を文例にて示せ。

〔三九〕動詞活用の見分け方

多くの動詞のうちには、その活用の紛れ易きものあり。今これを識別する便法を次に述べむ。

（一）上一段活用、下一段活用、ナ行變格活用、ラ行變格活用、カ行三段活用、サ行三段活用に屬する動詞は少けれども、その以外の動詞は次の方法による。

（二）「書か…む」「讀ま…む」「習は…む」などの如くその未然形「ア」段に活用するものは四段活用の動詞なり。

（三）「落ち…む」「起き…む」などの如くその未然形が「イ」段に活用するものは上二段活用の動詞なり。

（四）「受け…む」「榮え…む」などの如くその未然形が「エ」段に

活用するものは下二段活用の動詞なり。

練　習

一、次の動詞の活用形を見分けよ。

飛ぶ　語る　強ふ　撫づる　改む　答ふ

生く　朽つ　集む　聳ゆ

二、次の文中より動詞をぬき出してその何活用なるかをいへ。

(1)花の吹雪と散り布く中を走り行く。

(2)雲行けば舟もしたがひ、舟行けば雲もまた追ふ。

(3)夙に起き夜半に寢ねて、家業を勉強す。

(4)ほのかに聞ゆる瀧の音をしるべに道もなき山路をたどりぬ。

(5)をり〳〵に遊ぶいとまはある人のいとまなしとてふみ讀まぬかな。

(6)時餘りあれば更に冷水に浴し、さては素跣足にて裏の瓜畑に水を灌ぐ。

(7)天を相手にして己を盡し人を咎めず我が誠の足らざるを尋ぬべし。

(8)樊噲庭に立ちながら帷幕をかかげて項王を睨みし勢もかくやと覺ゆるばかりなり。

(9)彼は父の寫眞を、死ぬる際まで、肌身離さず持ち居たり。

(10)神の月日はこゝにも照れば、四季も來り、風雨雪霰かは。るゝ到りて、興淺からず、蝶來りて舞ひ、小鳥來りて遊び、秋蟲また吟ず。しづかに觀ずれば、宇宙の富は殆ど三坪の庭に溢るゝを覺ゆ。

三、國文讀本中の文章より動詞を抽き出してその活用形をいへ。

四、次の文語を口語に直せ。

(1)かの時の恥辱一生忘るゝこと能はず。

(2)死ぬる覺悟にて進みたり。

(3)彼の便利に代ふるに此ののどけさ靜けさあり。

(4)父母病あらば快復の望なくとも誰か一日も藥を廢せ

むや。

(5)魚跳つてまた水に落つる音石を投ぐるやうなり。

(6)一命を拋つとも其の面目を完うせむとす。

(7)飾少き座敷の床の間に投入の花一輪あざやかなるも却つて雅致の深きを覺ゆ。

〔四〇〕動詞の假名遣　動詞の活用には之を書き表はす假名と發音と一致せぬもの有るが故に往々誤を生ずることあり。たとへば

老いたる人はうたひの本をみてゐる。

の「老い」「うたひ」「ゐる」の「い」「ひ」「ゐ」の如し。かくの如く假名を

誤らずに書く法を**假名遣**といふ。今次に假名遣につき二三の事柄を注意せむ。

(一)動詞は五十音圖の一行に限りて活用するものなればある動詞の一の語形を知るときは他の語形を正しくかくを得べし。例へば「强ひ」は「ハ」行に活用するものなれば「强ゆ」は「强ふ」の誤にして「老ゆ」は「ヤ」行に活用するものなれば「老ひて」は「老いて」の誤なること明なるが如し。

(二)活用に「い」を必ず用ゐるべきは「老い」「悔い」「報い」(上二段ヤ行)の三語のみなり。これらは「ゆ」「ゆる」と活用するを以て「ヤ」行の音なるを知るべきなり。

(三)同じく「ヤ」行の動詞にて活用に「え」とかくべきは「消え」「越え」「榮え」(下二段活用)などなり。これらも必ず「ゆ」「ゆる」と活用するを以て誤ることとなし。

(四)この外「え」をかくべきは「得」(下二段ア行)のみなりとす。

(五)活用に「わ」をかくべき動詞は決してなし。活用に「ゐ」をかくべき動詞は「居る」「率ゐる」「用ゐる」(上一段ワ行)の三にすぎず。

(六)活用に「ゑ」をかくべき動詞は「植ゑ」「飢ゑ」「据ゑ」(下二段ワ行)の三のみなり。この三語の終止形「植う」「飢う」「据う」は誤りやすければ注意すべし。

(七)活用に「じ」とかくべき動詞は上二段サ行の「掘じ」とサ行三段活用の「感じ」「論じ」「重んじ」の類のみなり。

(八)活用に「ず」とかくべきはサ行三段活用の「感ず」「論ず」などの外はただ「掘ず」(上二段サ行)「混ず」(下二段サ行)の二語のみなり。

練習

一、次の文中の空位にかなを加へ、且誤あらば正せ。

(1)過は必悔○改めよ。恩は必報ひよ。

(2)友人を誘ゐ弟共を率いてすゞみに出かけ候。

(3)飢ふる者に食を與○よ。人の命は輕ん○べきものにあらず。

(4)彼は人を救ゐたり。その行誠に感ずるに堪えたり。

(5)岩を攀じ、谷を越えて、頂に達し、思わず大呼す。

(6)よく人を教○しかば就きて學ぶもの常に絶へず。

(7)御話の面白ひので思わず時間をすごしました。

【四】動詞の音便　「讀みて」「書きて」の如く動詞の連用形に「て」(口語にては「た」「て」)をつゞくる時には發音の便により時として「讀んで」「書いて」の如く他の音に轉ずることあり。之を**動詞の音便といふ。**音便には普通四種あり。

(一)「い」音便　四段活用カ行ガ行の動詞の連用形なる「き」「ぎ」の「い」に轉ずるものをいふ。

書きて……(書いて(文語)　書いた(口語))

漕ぎて……（漕いで（文語）　漕いだ（口語））

（二）「う」音便　四段活用ハ行の動詞の連用形なる「ひ」の「う」に轉ずるものをいふ。

問ひて……（問うて（文語）　問うた（口語））

（三）「ん」音便　四段活用のバ行マ行及びナ行變格活用の連用形なる「び」「み」「に」が「ん」音に轉ずるものをいふ。

飛びて……（飛んで（文語）　飛んだ（口語））

讀みて……（讀んで（文語）　讀んだ（口語））

死にて……（死んで（文語）　死んだ（口語））

（四）促音便　四段活用のタ行ハ行ラ行及びラ行變格活用の連用形なる「ち」「ひ」「り」が促音に轉ずるをいふ。

勝ちて……（勝つて（文語）　勝つた（口語））

從ひて……（從つて（文語）　從つた（口語））

取りて……（取つて（文語）　取つた（口語））

有りて……（有つて（文語）
　　（有つ（た）て（口語））

練習

一、次の文中の傍線を施せる語を音便に改めよ。

(1)みづから請ひて義勇兵となる。

(2)勇み立ちたる人々は喜びて出發の準備をしたり。

(3)都下の人口は年を逐ひて增加す。

(4)進みては忠をつくさんことを思ひ、退きては君の過を補はんことを思ふ。

(5)金波萬里の光に對ひてはいつか夜の更行くをも忘るるなるべし。

二、次の文中の音便を正しき活用になほせ。

(1)予幸に君の交情看護に因つて再生するを得たり。

(2)國民は仰いで文治の宗と爲し、外人は目して平和の表と爲す。

(3)河流に沿うて牧場多くテントを張つて生活する土民を見る。

(4)家の四方に散在せる雞この聲を聞いて喜んで集り來り先を爭うて食ふ。

(5)よしや子を持つて未だ親の恩は知らずとも物のあはれは自ら知らるべくや。

三、次の文に於ける音便の誤を正せ。

(1)溪に沿ふて進む。

(2)職工皆樂しむではたらく狀感ずるに堪へたり。

(3)敵は終に國を割ひて和を請ふた。

(4)學問は重荷を負ふて坂を攀づるが如し。

四、次の文章のうちより動詞を抽き出し、その假名遣の誤れるものは正せ。

(1)陣形を整ふるに先だちて襲ふて敵を破る。

(2)笑ふて答えず。

(3)歌いて植へよや門田の早苗。

(4)食ふてその味いを知らぬは食はぬに等し。

(5)恩に報うることを知らぬものは人非人なり。

(6)負ふた子に教えられて淺瀨を渡る。

(7)養ふた上に敬うことが大事だ。

(8)恥じて能く改め、覺へて忘れず。

(9)我が言う事を用いずば後に悔ふとも及ばじ。

(10)飢へ凍へたるものは衣食を擇ぶに遑あらず。

(11)余は久しく病牀に呻吟せしが母が心をつくしし甲斐ありて、さしも重かりし病氣もやう〳〵癒へて歩行に堪ゆるに至れり。

(12)耳を掩ふた太郎作がまだ半町と逃げ延びぬ中に、鳴る光る降る吹く、世の終かと思う程の暴れやう。

第四章　形容詞

【四三】山高し。
風涼し。
清き水流る。
美しき花咲く。

右の文例において「高し」「涼し」「清き」「美しき」は何れも事物の有様をあらはしたる單語なり。かくの如きものを**形容詞**といふ。

【四四】山高くば眺望よからむ。

形容詞と動詞とを總稱して**用言**といふ。

高（しく・く・き・けれ）　涼（しく・く・しき・けれ）

（一）山高く聳ゆ。
　　山高し。
　　高き山に攀ぢ登る。
　　山高ければ眺望に富む。

（二）風涼しくば心地よからむ。
　　風涼しく吹き渡る。
　　風涼し。
　　涼しき風絶えず吹く。
　　風涼しければ心地よし。

右の文例より推して形容詞に關し次の事柄を知るべし。

（一）形容詞も動詞の如く活用す。

(二)動詞は五十音圖の一行に限りて活用すれど、形容詞はカ行サ行の二行に亘りて活用す。これ兩者の異なる點なり。

(三)形容詞の活用形は(一)の如きものと(二)の如きものとの二種あり。

(四)形容詞の活用形は、その用方、動詞に同じく、從つてその語形の名稱も動詞に準ず。但形容詞は命令形を缺く。

(五)形容詞の活用形は未然形と連用形と相同じ。

【四五】「高し」「涼し」の形容詞につき口語の活用形を考へみよ。

然る時は前者は終止形、連體形が「い」となり、後者は同じく終止形、連體形が「しい」に變り、したがつて口語にては形容詞の活用形は、

(高)　く　い　けれ

(涼し)

といふ形一種となれるを知るべし。

【四六】「如し」といふ形容詞は特別なるものにして已然形を缺き、なほ、上に名詞、代名詞、又は用言の連體形を受けてはじめて形容詞の用を完くするものなり。

月の光明にして晝の如し。

歳月は流るゝ如し。

漕ぎゆく舟のあとなき如し。

〔四七〕形容詞にも音便あり。例へば「善きかな」とすべきを「い」音便によりて「き」を「い」に變じ、「行正しくして」とすべきを「う」音便によりて「く」を「う」に變じて

善いかな。　行正しうして、

とするが如し。

〔四八〕用言の活用せざる部分を**語幹**といひ活用する部分を**語尾**といふ。例へば「遮る」、「高し」の「さへぎ」「たか」は語幹にして「る」「し」は語尾なり。

練　習

一、形容詞の活用形を文語と口語と對照して表にて示せ。

二、次の文中より形容詞を抽き出してその活用形をいへ。

(1)月は益々淡く、東いよ〳〵白し。

(2)命より名こそ惜しけれ、武士の道にかふべき道しなければ。

(3)海邊は空氣が淸く、冬も暖い。

(4)新しい方が値が高く、物がよろしい。

(5)取締を嚴しうして、社會の風紀を改めた。

(6)死は鴻毛よりも輕く、義は泰山よりも重し。

(7)物價たかければ出費多く、交際繁ければ萬事うるさし。

(8)あかるう見ゆるほど氣持よい事はない。

(9)その色のうるはしう、その香のゆかしい事も一の源因

であらう。

(10)魚釣も亦好きな者には此の上も無い樂しい遊びである。

第五章　助動詞

【四九】賞を受くれども驕らず。

日影はやうやく、わがもとに來りぬ。

一見して知るを得べし。

右の文例において「ず」は上の動詞を助けて打消す意味をあらはし、「ぬ」は動作の完了したるをあらはし、「べし」は推量の意味をあらはすに用ゐらる。かくの如く動詞の下につきて

更にその意味を助くるに用ゐるものを**助動詞**といふ。

【五〇】一つの助動詞を附するのみにて意義不十分なる時はなほ他の助動詞を附することあり。例へば

ただ人口の多きを以て誇るべからず。

丘上の老松は行平の月見の松と名づけられたり。

の如きこれなり。

【五一】

(一)

しめ　しむ　しむ　しめ　しめ　しむ　しむれる

彼をして平時に出でしめば亦治平の良宰相ならむ。

この言にては未だ首肯せしめ難かるべし。

教師、生徒に本を讀ましむ。

實に外人をして驚かしむるものあり。

大音聲にて下知せしむれどしづまらず。

（一）一切馬を殺さざるやう取計らはしめよ。
（二）彼はかく言ひき。
（三）かく言ひし人は誰か。
（四）かく言ひしかど予信ぜず。

（しき）
（しか）

右の文例によりて助動詞に關し次の事柄を知るべし。

（一）助動詞も動詞、形容詞の如く活用す。

（二）助動詞が動詞（助動詞）につくにはそれ〴〵一定のきまりあり。

【五三】助動詞の活用には、下二段活用、ラ行變格活用、ナ行變格活用、形容詞の如きあり、或は全く特殊のものあり。今次に各の助動詞の活用を表にて示さむ。

（一）下二段活用に似たる活用なるもの　「る」「らる」「す」「さす」「しむ」「つ」などこれに屬す。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	
書か	れ	れ	る	るる	るれ	れ	四段變格の未然形につく
教へ	られ	られ	らる	らるる	らるれ	られ	二段一段三段の未然形につく
書か	せ	せ	す	する	すれ	せ	四段變格の未然形につく
教へ	させ	させ	さす	さする	さすれ	させ	二段一段三段の未然形につく
書か	しめ	しめ	しむ	しむる	しむれ	しめ	すべての動詞の未然形につく
書き	て	て	つ	つる	つれ	（て）	すべての動詞の連用形につく

●終止形の語形を以てその助動詞の名稱とす。

●表中括弧内の活用は殆ど現代文に用ゐられず。以下之に準ず。

「る」「らる」「る」「す」「さす」の助動詞は口語にては下一段活用の如き活用をなす。「しむ」は口語には用ゐられず。なほ口語には別に「せられる」が約りて「される」といふ形となりて下一段の如く活用す。例へば「許可され」「許可される」「許可されれ」の如し。

「つ」は口語にてはただ「て」といふ連用形のみ存す。

(二)ラ行變格に似たる活用なるもの　「たり」「けり」これに屬す。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	
書き	たら	たり	たり	たる	たれ	○	すべての動詞の連用形につく
書き	○	○	けり	ける	けれ	○	同上

右のうち「けり」は口語には用ゐず「たり」は口語にては次の如き活用をなす。

書きたら　たり　たり　たる　たれ

(三)ナ行變格に似たる活用なるもの　「ぬ」これに屬す。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	
書き	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	(ね)	動詞の連用形につく

これは文語にのみ用ゐて口語には用ゐず。

(四)形容詞に似たる活用なるもの　「たし」「べし」「まじ」これに屬す。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	
書き	たく	たく	たし	たき	たけれ	○	動詞の連用形につく
書く	べく	べく	べし	べき	べけれ	○	動詞の終止形につく但ラ變に限り連體形につく
書く	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	○	同上

右のうち「べし」は口語には用ゐず、「まじ」は口語にては「まい」となりてただこの語形のみ存し「たし」は「たい」となりて口語の形容詞の如き活用をなす。なほ口語には「ない」「らしい」といふ助動詞ありて口語の形容詞の如き活用をなす。

(五)特殊の活用なるもの　「ず」「む」「き」などこれに屬す。

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形	
書か	ず	ず	ず	ぬ	ね	○	動詞の未然形につく
書か	○	○	む	む	め	○	動詞の未然形につく
書き	○	○	き	し	しか	○	動詞の連用形につくカ三段サ三段につくには例外あり

「き」の活用「し」「しか」はカ行三段活用には未然形連用形につけど「き」はつかず。又サ行三段活用には「き」は連用形に「し」「しか」はその未然形につく。而この「き」は口語に用

ゐることなし。又右の「ず」は口語にては「ぬ」となり「む」は「う」または「よう」となる。

練習

次の文中より助動詞を抽き出してその活用を考へよ。

(1)夜の明けぬ中に家を出でむ。

(2)日も暮れはてて、物のあやめも見えずなりぬ。

(3)柳處々にありて末は霞に包まれたり。

(4)家貧しければ高等の教育も授けられず、讀書算術を學ばせたる後はいづれも自活の途につかしめぬ。

(5)講じ終りし後、ゆるゝ不審の箇所を問ふべしと諭されぬ。

(6)秋來ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞ驚かれぬる。

(7)弱屈だから出ようとするが出られない。

(8)ゆめ〳〵怠ることなかれと誡められたりき。

(9)幾多の艱難を經、辛苦をこらへて事業を完成した時の心持も大方こんなものであらう。

(10)常に事業を擴張せむと欲する者は絶えず資本の增加を圖らざるべからず。

【五三】助動詞のあらはす意義は種々あり。今それらの意義

を說かむ。

(一)「る」と「らる」とは意義全く一にして、これらは

かれが爲に破らる。

博覽達識を以て世に稱せらる。

の如く動作を他より受くる意味をあらはすに用ゐらる。

これを受身といふ。又これらは

秋の花盛りの美しさ想ひやらる。

高き峠も下駄にて越えらる。

の如く能力の存する意味をあらはすに用ゐらる。これ

を可能といふ。「る」「らる」はなほ一歩進みて次の如く

兄上門松を立て、神棚を飾らる。

主人は今朝旅行先より歸宅せらる。

の如く崇敬の意をあらはすに用ゐらる。この故に「る」「ら

る」には三種の意味ありと知るべし。

(二)「す」と「さす」とは意義全く一にして、これらは

高雄の紅葉も流に映じて錦を漂はす。

栗を籠に入れさす。

の如く、他をして動作をなさしむる意味をあらはすに用

ゐらる。これを使役といふ。又これらは

日本海海戰には勇敢に戰はせ給へり。

皇太子殿下には北海道に行啓せさせ給ふ。

の如く崇敬の意をあらはすに用ゐらる。この故に「す」「さ

す」には二種の意味ありと知るべし。

(三)「しむ」も亦「す」「さす」と同じく、

文明諸國に於ては多く強制して種痘を行はしむ。

の如く使役をあらはすものと

天皇陛下には大觀兵式に臨まじめ給へり。

の如く敬意をあらはすものとの二種の意味あり。

(四)「ず」は打消す意味をあらはすものなり。

人は單獨に孤立して生活し得るものにあらず。

又「ざり」といふ語ありてこれも打消す意をあらはせり。

人物の出でざる蓋し怪むに足らず。

容易くいふべきにあらざれどもかくさず申さむ。

右の文例にあるざりは打消の「ず」とラ行變格の「あり」と連結したるものにて、その活用もラ行變格活用に同じ。但終止形を有せず。

(五)「む」は將來の事を豫ねていふ意味をあらはすものなり。

勉めてやまずば何事も成就せむ。

(六)「つ」「ぬ」「たり」はその事の完了せる意味をあらはすものなり。

ふと樵夫の唄聞えつ。

日は暮れぬ。

日は出でたり。

(七)「き」「けり」は過去にありし事を思ひめぐらしていふ意味

をあらはすものなり。

かゝる例も數々ありき。

昔支那に孔子といふ人ありけり。

(八)「たし」は希望の意味をあらはすに用ゐらる。

されど故郷には歸りたし。

(九)「べし」は種々の意味をあらはす。

一見して知るを得べし。

右の文例においては推し量る意味をあらはすに用ゐたり。又

以てその注意深きを見るべきにあらずや。

三尺の秋水鐵をもたつべし。

の如く可能の意をあらはすものと、

事務を取るには瑣事たりとも仔細に吟味すべし。

の如く指圖することを示すものあり。又

人は必道德を守るべきものなり。

の如く義務の存するをいへるものあり。

又「べかり」といふ語ありて、「べし」と略同じ意をあらはせり。

酒を飲むべからず。

本を讀むべかりき。

この「べから」「べかり」は「べし」とラ行變格活用の「あり」と連結したるものにして、その活用もラ行變格活用の如し。但し、普通文に用ゐるは上例の如く未然形連用形のみなり。

(一〇)「まじ」は打消す意の推量をいふに用ゐらる。

よも忘れはすまじ。覺悟せよ。

練習

次の文章中より助動詞を抽き出してその活用及び上の語との連結、並に意義を吟味せよ。

(1)いと華美に裝ひたる武士をその側に侍らしめき、

(2)十五夜に影を見せざりし月は今宵照りいでぬ。

(3)知らぬ事は知らずと答ふべし。

(4)毎日千字づつ書出すべしと命ぜられたり。

(5)砂漠の中に出でければその困苦いふべくもあらず。

(6)冬枯の景色こそ秋にはをさ〳〵劣るまじけれ。

(7)書籍室は船の前方にあり、凡そ二十疊を敷くべし。

(8)物羨みはすまじきものよと諭されたり。

(9)今日になつて菊作らうと思ひけり。

(10)他人のつくりたるものによりて利益を占めむと思ふが如き考にては到底望なし。

(11)天然界の一木一石も史上の遺蹟としては觀る者をして懷古の情に禁へざらしむ。

(12)病院の患者は悉く救はれて一人の負傷者無きを得たり。是全く御身が職務に忠實なりし賜に外ならず。

(13)勝重直ちに對面したるに威儀あり、氣品ありて世の常

の女とは見えず。

(14)徐の君つら〳〵季子の劍を見て口にこそ言出でざれ、欲しと思ふ色面にあらはれたり。

(15)唯萬事に於て予が意志の予が利己心のために支配せられざるは恐らく予が唯一の特質ならむ。

【五四】助動詞の用方につき特に注意すべき事柄を次に列擧せむ。

(一)崇敬の意の「す」「さす」「しむ」は單獨に用ゐることなく、「らる」又は動詞「給ふ」と結合して用ゐるを常とす。

(二)「らる」がサ行三段活用につくには、その未然形をうけて

ませ、まし、ましか。けむ、けめ。

「許可せらる」などすべきを、口語にてはこれを約めて「許可される」と用ゐることあり。

(三)「さす」がサ行三段活用の動詞につくにはその未然形をうけて「修繕せさす」「案内せさす」といふべきを口語にては「修繕させる」「案内させる」と用ゐることあり。

(四)現代の普通文には用ゐられざれど、古風の文章に散見する助動詞二三をあぐれば「まし」「けむ」「らむ」「らし」「めり」などなり。これらは何れも推量の意味を有するものなり。

春の心は長閑からまし。

あはれこの槍もていかに戰場に駈驅し給ひけむ。

らむ、らめ。
らし。
めり、める、めれ。

秋はつる色のかぎりを見するなるらむ。
山の紅葉も今は散るらし。
立田川紅葉亂れて流るめり。

(五)助動詞がいくつも相連結したる時はその助動詞の各の意義より推してその意義を知るべし。

讀みたりけむ。　咲きぬらむ。
散りてき。　咲きたるらむ。
優りたりけり。　優りてけり。
知りてむ。　滅びてけむ。
知りなむ。

練習

一、次の文中にある助動詞の意味を吟味せよ。

(1)參議百川謀をめぐらして定め申してき。
(2)眞中さして射透し候ひなむ。
(3)藏王堂の大庭に宮一同を集めさせ最後の酒宴を張らせらる。
(4)三箇日の朝な〳〵雜煮の餅を祝ふも古き風俗とて嬉しく、七日の粥にも若菜つみけむ昔おもほゆ。
(5)たつた川紅葉亂れて流るめり、渡らば錦中やたえなむ。
(6)御覽じ忘れさせ給ふにつけても身の衰へぬる程思ひ知られ候。

(7)吉野山やがて出でじと思ふ身を花ちりなばと人やまつらむ。

二、次の文章に誤あらば正せ。

(1)義經、與市をして扇眼を射せしむ。
(2)此品に手を觸るゝべからず。
(3)此處に塵芥を捨つるべからず。
(4)彼は毎夜深更まで勉强するらし。
(5)無用の事には關係せまじきものなり。
(6)不都合の事なきやうこゝろふべし。
(7)そうゆうわけはなかろふとおもう。
(8)富士山巓の雪は夏も絶えまじ。

(9)事こゝに及びては斃る處まで行くよりほかなし。
(10)萬里の波濤も越えば越ゆるべし。
(11)腐敗ししものを食はば必ず胃を害するべし。
(12)夕陽山の端に殘影をとどむ頃顧みがちに別れ行く。
(13)彼かくいひ出せし時衆皆驚きぬ。

第六章　副詞

【五五】空にはかに曇る。

學未だ成らず。

山はいよ〳〵高く、路はます〳〵險し。

右の文例において「にはかに」「未だ」「いよ〳〵」「ます〳〵」は何

れも「曇る」「成らず」「高く」「險し」等のそれぞれの動詞、形容詞に副ひてその意義を限定せり。すべてかくの如く用言の意義を限定するために副へて用ゐる單語を**副詞**といふ。

【五六】副詞は、往々他の語を隔てゝ下の用言の意義を限定することあり。

あゝ諸子は既にことの意を悟りたらむ。

幸にして虎口を脱せり。

【五七】副詞には他の副詞の上に直接に副ひてその意義を限定するものあり。

やゝ暫く考ふ。

最も早く來る。

練習

一、次の文中より副詞を抽き出せ。

(1)やがて日は紅の球を搖して山に落ちぬ。

(2)新月の影まさに海角をはなれたり。

(3)辯士は悠然と演壇に登りて徐に說き出せり。

(4)夕景始めて傘さして賴家卿の墓を拜しぬ。

(5)王何ぞ必ずしも利をいはん、唯仁義あるのみ。

(6)志を立てゝ只管勉强せば、終には業成る日あるべし。

(7)しば〳〵友人に訪はれたれど我は未だ一回もその友人の家を訪ひたる事なし。

(8)これらの動物は唯子を生んで養ふばかりでなく、尙これを教へ導いてから、初めてこれを手放すのである。

(9)骨を埋むる豈ただ墳墓の地のみならむや。人間到る處青山あり。

二、國語讀本の一課より副詞を集めよ。

三、次の副詞を用ゐて短き文を作れ。

最早　ついに　豈に　益〻

蓋し　敢へて　況んや　若し

只管　忽ち　專ら　既に

第七章　接續詞

〔五八〕欅は建築及び器具の料に賞用せらる。

見わたす限り山又山。

ます〳〵學問を勵み又其の身の行を愼めり。

庭はただ三坪、誰かいふ、狹くして且つ陋なりと。

右の文例において「及び」「又」「且」は上下の語を連ね、又は文と文との間に入りてその意義を結び付くるに用ゐらる。かくの如きものを**接續詞**といふ。

練　習

次の文中より接續詞を抽き出せ。

(1)霞か雲かはた雪かとばかり匂ふ山櫻。

(2)故郷の慕はしきは必ずしも山水の美なるが爲に非ず、又風土の住みよきが爲にも非ず。

(3)明日は雨もしくは雪となるべし。

(4)知りて行ひしか、抑も亦知らずしてか。

(5)諸車通行止。但し空車はこの限にあらず。

(6)敵は小勢なり。さりながら侮り難し。

(7)この地氣候溫暖なり。故に良き柑橘類を生ず。

(8)詩文をもつて名あり。然れどもその心を用ゐたるは經濟の學なり。

(9)稚魚及び産卵期の親魚を漁獲することを戒めざるべからず。

(10)用事以外に交際あり。されば用なしとて人を訪はざるは、交際の道を知る者にあらず。

第八章　感動詞

〔五九〕あゝ、わが思ひは足り、わが心は樂し。

いざ、あすは故郷へ歸らむ。

すはや、敵こそ攻め來れ。

あな、すさまじの瀑の音。

右の文例において「あゝ」「いざ」「すはや」「あな」は何れも感動したる意をあらはす單語なり。かくの如きものを**感動詞**といふ。

練習

次の文中より感動詞を抽き出せ。

(1)あはれこの家に老人もありつるなるべし。

(2)あらうれしや紛ふ方なき先君が無念の御太刀筋。

(3)いで潔く散らばやと宮は覺悟をきめ給ふ。

(4)そらまた浪が寄せてきたぞ。

(5)いや某は名字も無き者にて候ふ。

(6)嗚呼あつぱれな勇士だ。敵ながらもお前のやうな勇士は殺すに忍びない。

(7)おいと聲を掛けたが返事がない。

(8)あつぱれ平將軍の再來かな。

(9)ああ一少女の一念よく幾多の尊き生命を救へるなり。

師範學校 **日本文法教科書** 上卷終

大正十四年十一月三日印刷
大正十四年十一月六日發行
大正十五年三月廿二日訂正再版印刷
大正十五年三月廿九日訂正再版發行

定價	
上卷	金貳拾五錢
下卷	金貳拾四錢
大正十五年度臨時定價	
上卷	金四拾參錢
下卷	金四拾壹錢

師範學校日本文法教科書
許可
檢定

著作者　山田孝雄
發行者　大葉久吉　東京市日本橋區本銀町三丁目拾四番地
印刷者　吉田松次　東京市牛込區市谷加賀町一丁目拾貳地地
印刷所　株式會社秀英舍

發行所
關西專賣
東京市日本橋區本銀町三丁目
振替口座東京二八〇番
東京寶文館
大阪市西區阿波堀通四丁目
振替口座大阪四三番
株式會社大阪寶文館

広島大学図書
2000301923